

A—21 幼児の食生活に関する研究
(第3報) 一僻村の幼児の冬季における栄養摂取について—

県立新潟女短大 岡田 玲子

1. 先に私共は夏季における僻村の幼児の栄養摂取状況を体位との関連性において検討した。その結果、蛋白質栄養とビタミン摂取において憂慮すべき欠陥がみられ、殊に動物性蛋白質比と体位（特に身長）との間に有意の相関が認められ、幼児栄養の問題点は蛋白質及びビタミン栄養にあることがうかがわれた。しかしながら、幼児の摂食状態は個人により、また日によって大きく変動するので、限られた短期間の調査成績では推測し得ない問題が多々残される。それでより詳細にして正確な実態を把握するために、積雪に閉された冬季の食生活について、前報と同様の調査を行なったので、その結果を報告する。

2. 対象部落の幼児25名について、41年12月と42年4月のそれぞれ5日間の食餌摂取状況を個人別秤量方式により調査した。これによって得られた各人の栄養摂取量を昭和45年を目途とした年令別性別所要量と対比し、更に夏季の調査結果と比較、検討した。

3. (1)摂取食品数は夏季・冬季を通じて殆んど変動は認められなかったが、食品群別摂取量において穀類、油脂類、豆類、緑黄野菜、果実、牛乳等の増加がみられた。その結果、総体的栄養摂取比率は12月81%、4月88%で、夏季の63%に比し、それぞれ28%、39%高い。(2)脂質、カルシウム、V. A、V. C の摂取率は夏季のその約1.2～2倍に上昇したが、V. B₁、V. B₂ の摂取率は夏季と殆んど差がない。(3)摂取蛋白質の動蛋比は12月27%、4月24%で、夏季の30%に比し若干低く、Protein Score は12月73、4月72で、夏季の76に比しやや低値であり、また制限アミノ酸は含硫アミノ酸、トリプトファン、メチオニンの3つである。